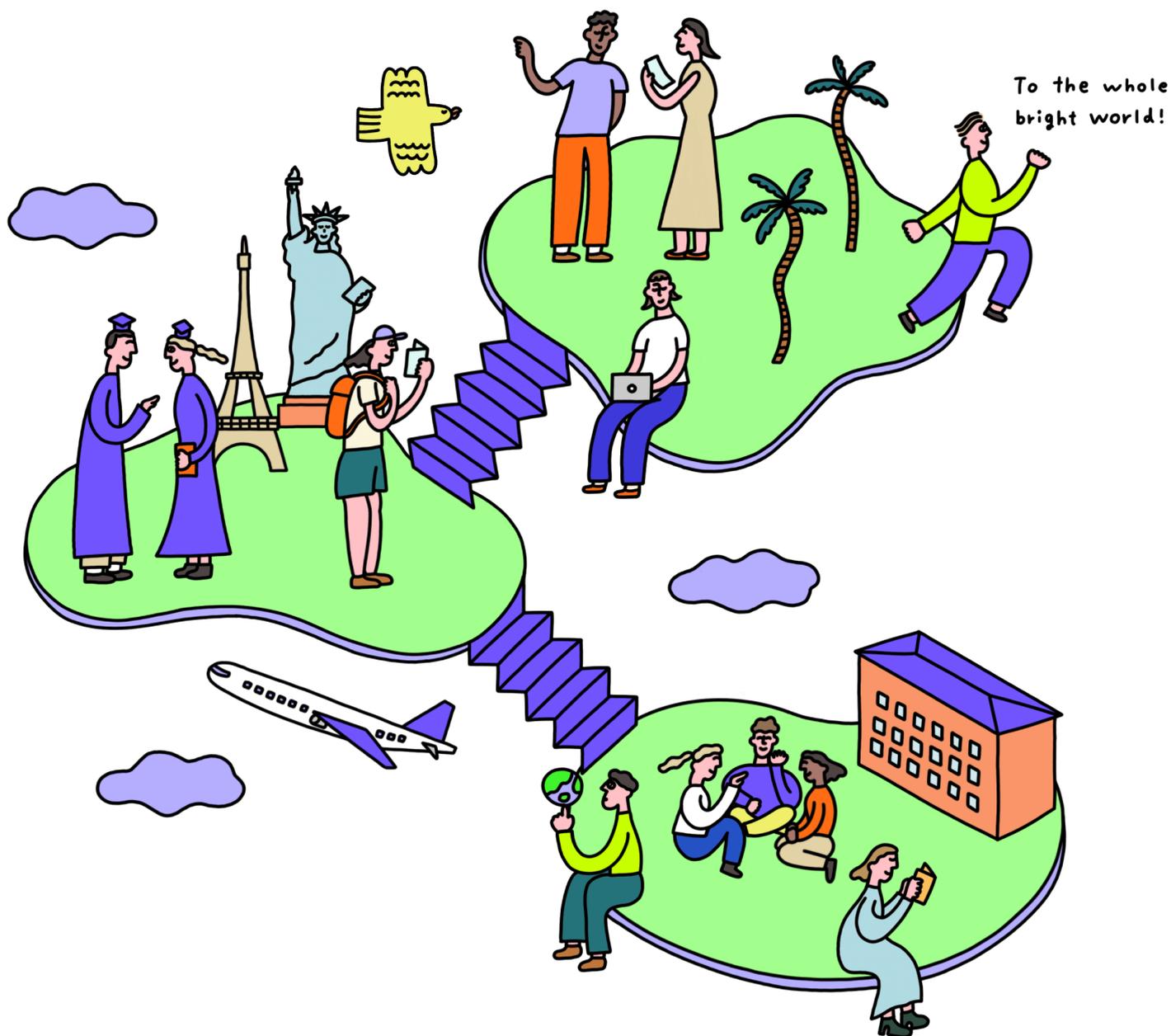


外国語学部 演習 | 紹介



SEI[†]NAN
GAKUIN UNIVERSITY

目次

演習Iの内容説明

ジャン＝リュック アズラ: フランス語学 言語とは何か	5
一谷智子: 英語圏文学・文化 エコクリティシズム—人間と地球をまもる文学的想像力	6
伊藤彰浩: 英語学 外国語の学習・習得を科学する	7
ドウエン オルソン: コミュニケーション学 1) レトリックとパブリックアドレス 2) レトリック・マスコミ論・クリティカルシンキング	8
ユスチナ W. カシャ: 文学・文化 翻訳演習: 理論と実践	9
加藤陽介: 英語圏文学・文化 イギリス帝国の歴史と英語圏文学	10
金子幸男: 英語圏文学・文化 ヴィクトリア朝イギリス社会／文化を理解する: イングリッシュネスとブリティッシュネス	11
河原真也: 英語圏文学・文化 アイルランドとはどのような国か?	12
北垣徹: 社会学 グローバル・フード・スタディーズ	13

目次

演習Iの内容説明

清宮徹:コミュニケーション学 社会と組織におけるコミュニケーション問題を考える(視座と方法)	14
杉山香織:フランス語学 AIから学ぶデータマイニング入門	15
谷川晋一:英語学 ことばの仕組みと意味	16
ティエリー トリュベール:語学 映画・絵画・写真を通して観た食文化	17
C.L. ドーハティ:言語文化学 「オリエンタリズム」と「カウンター・オリエンタリズム」:美術作品と広告、映画で学ぶ	18
中西弘:英語学 英語音声の仕組みと習得メカニズム	19
藤野功一:英語圏文学・文化 アメリカン・モダニズムと大衆文化	20
リチャード・ホドソン:英語圏文学・文化 Shakespeare on page, stage, and screen	21
三宅敦子:英語圏文学・文化 19世紀のコミュニケーションをイギリス文学で学ぶ: <i>Pride and Prejudice</i> 輪読	22
宮原哲:コミュニケーション学 「コミュカが高い」の理解と実践	23
宮本敬子:英語圏文学・文化 アメリカ映画・文学における人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティ表象	24

目次

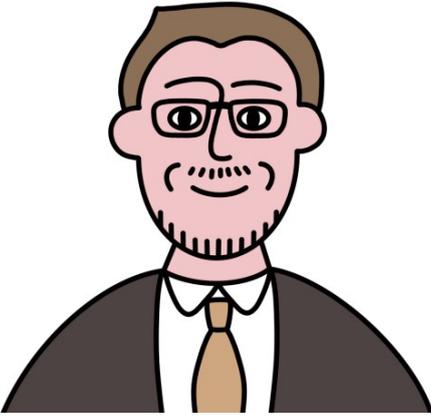
演習Iの内容説明

山田智久:日本語教育学 多文化共生社会における社会課題を見つける	25
山元里美:社会学 世界における環境意識について学ぼう	26
横溝紳一郎:日本語教育学 めざそう、外国語を教える／学ぶプロ！	27
和田光昌:フランス語圏文学・文化 世界を「うけいれる」-- フランス/文学のいま	28
石田由希:英語圏文学・文化 映画の「かたち」を読む	29
初見かおり:人類学 他者と生きる	30
ケリー ベノム:言語学 Word Meaning in Mind, Culture and Context	31
カタリナ バークレー:コミュニケーション学 Exploring International Corporate Communication	32

Jean-Luc Azra

ジャン＝リュック アズラ

言語とは何か



専門分野

フランス語学（フランス語史）、日仏比較社会学、言語学、言語教育学、社会学

専門分野の概要

まず、言語学では、言語の歴史、言語が時間とともにどのように変化するかについて研究しています。古い言語（古フランス語、古英語、ラテン語など）と現代の言語の関係を扱っています。特に、フランス語の母音の歴史的变化、ラテン語からの古フランス語の発展、メディアに表れるフランス語の近年の変化について研究しています。

次に、言語教育学では、日本における外国語教育とフランス語教育の教授法について研究しています。外国語学習と認識（言語やコミュニケーションをどのように捉えているか）の関係、それはどのように変化するのかに興味を持っています。

<演習内容>

本演習の専門分野は言語学です。目的は、人間の言語についてより正確に理解し、その解像度を上げることです。そのために、「言語」を構成する主要要素の定義について学んでいきます。一般に言語について考えられていることと、言語学的（科学的）な説明との間には違いがあります。例えば、外来語と外国語のちがい、地域方言と社会方言のちがい、方言と標準語の関係、公用語と共通語のちがい、文字と言語の関係、言語の変化と社会の関係、規範意識（何が「正しい」のか）と言語の実態の関係などです。演習では、以下のテーマを扱います。

- 言語とは何か
- コード
- 正書法（書き方）
- 文字や記号で言語を表す方法
- コーパスとインターネットによる言語の研究方法
- 言語に対する2つのアプローチ：規範文法と記述文法
- 方言、標準語、公用語など
- アクセントと訛り
- 音声学と音韻論
- 文法と形態論
- 地域方言と社会方言、個人方言
- 新語・言語の変化
- ピジンとクレオール
- 言語政策
- 英語史・フランス語史

<実施言語>

英語とフランス語。日本語のテキストは使用しない。

<ゼミ独自の選抜方法について>

応募書類は日本語、英語、フランス語のいずれかで作成。

<演習 I と演習 II の連続性について>

Related but not sequential

<卒論の推奨について>

いちたにともこ 一谷智子

エコクリティシズム—人間と地球をまもる文学的想像力



専門分野

英語圏文学・文化（オーストラリア文学・環境批評）

専門分野の概要

オーストラリアを中心とした現代英語圏の文学・文化が専門です。先住民や世界各地からの移民との共生を模索する社会で生まれている文学や文化を、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、植民地主義、環境問題などの横断的視点から研究しています。私たちを自分の〈外部〉へと連れ出し、さまざまな境界を問い直させてくれる文学の力、人間と人間でないものをも含む他性にかかれた文学の営みに関心があります。

<演習内容>

本演習では、「エコクリティシズム」と呼ばれる環境人文学の方法論を学び、英語圏と日本を中心とした文学・芸術作品を読み解きながら、人間社会や文化と自然環境の相互的關係について考えます。環境研究と言うと、みなさんはデータ収集や統計などの実証的な方法を想像するかもしれませんが、しかし本演習では、定量化されにくい側面に注目し、歴史的経緯や文芸作品の表現、倫理的な問題を考察することを目指します。過剰な競争と格差、環境破壊の現状を見つめ直す動きは、持続可能な社会の実現に向け、「誰一人取り残さない」ことを理念として掲げたSDGsのような国際的目標にもあらわれていますが、こうした目標を理念だけに終わらせないためには、問題へのより深い省察が必要です。産業革命や大規模農業、植民地主義、グローバル資本主義、戦争・核実験など、人間の活動がもたらした地球規模の環境変化や、弱い立場に置かれた者がより大きな環境被害を受ける構造的問題を、文学や芸術はどのように描いているのでしょうか。人間と地球環境をまもるためにわたしたちはどのように考えて行動すればよいのか、複眼的かつ批判的な視点を持ち、自らの疑問点や関心を探究する力を養います。

前半は、エコクリティシズムの入門的文献（Lawrence Buell, Ursula K. Heise, and Karen Thornber. “Literature and Environment,” *Annual Review of Environment and Resource*, 36, 2011）を通して、①「環境批評の歴史と概念」、②「ローカルかつグローバルな場所への想像力」、③「文学と自然科学の關係」、④「ジェンダー（エコフェミニズム）」、⑤「（ポスト）コロニアリズムと環境問題」、⑥「先住民の自然観」、⑦「ノンヒューマン（動物・AI）と人間の關係」、⑧「気候危機」、⑨「原爆・原発をめぐる汚染の言説」、⑩「環境正義（公正性）」など、環境批評の様々な視点と方法論を学びます。後半では、学んだ視点や方法論を用いて、授業で指定された、または自分が選んだ作品を分析し、レポートやプレゼンテーションにまとめます。文学だけでなく絵画、映画、漫画、音楽、ドキュメンタリー、アニメーション、インスタレーションなど、芸術全般が考察の対象となります。フィールドワークやグループワークも取り入れます。

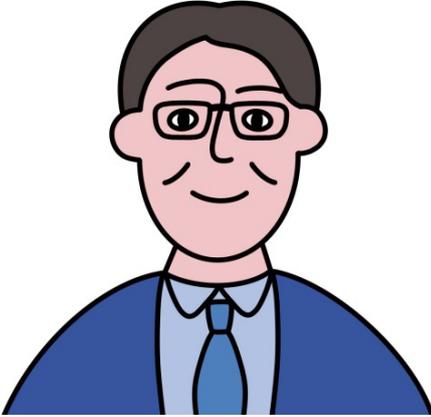
<使用言語> 日本語と英語（講義は日本語で行い、英語と日本語、両言語のテキストを使用します）

<ゼミ独自の選抜方法について> 原則、志望動機書をもとに選抜を行います。

<演習ⅠとⅡの連続性について> 演習ⅠとⅡを続けて履修することで学びはより深まりますが、演習Ⅱからの履修も歓迎します。

<卒論の推奨について> 演習Ⅱでは、大学での学びの集大成として、卒論またはゼミ論の執筆を推奨しています。

外国語の学習・習得を科学する



専門分野

英語学（第二言語習得研究、テスト理論）、言語テスト、英語科教育学

専門分野の概要

英語学（第二言語習得研究とテスト理論）と英語科教育学を専門としています。第二言語習得研究では、日本人英語学習者の英語の学習・習得について研究しています。日本人英語学習者が関係節、wh疑問文、tough構文に出会ったとき、どのような点を難しいと感じ、そして、どう克服して、理解・産出ができるようになっていくのか、その過程に興味があります。テスト理論の研究では、標準型外国語テスト（例：TOEIC®、IELTS®）と自作の cloze test やC-test の信頼性と妥当性を検証しています。英語科教育学の研究では、学生たちが、どのような経験を踏まえて教員になることを選択するのか、そしてベテランの先生方の授業を観察し、自分の知識や能力と変換していく過程に関心をもっています。

<演習内容>

この「演習I」は、外国語学部での2年間の学び（例：英文法、英語学概論、英語科教育法、英語科指導法）を踏まえて、英語学の研究に興味・関心のある学生、そして将来、外国語教育関係の仕事（英語教員、フランス語教員、その他、教育関係の職業）に興味のある学生に適していると思います。

1年間のスケジュールは次の通りです。4月から5月は、興味・関心のあるトピックについて各自が発表し全員でその内容についてディスカッションをします。この期間に1年間のゼミ活動で自分が何をしたいのか考えてもらいます。そして6月から7月末までに、どのような方法を用いて研究するのか決定します。夏休み期間を利用して、(1)文献収集法、(2)論文・報告書の批判的な読み方、(3)課題の設定方法、実験・調査の計画（対象者の選定と依頼方法、アンケートやテストの構築、手順、分析法の決定）について、個別指導を通して学びます。9月から10月末までに、実験・調査を実施します。そして、11月から12月に実験・調査の結果を分析・報告し、考察の視点と結論の書き方について学びます。年明けの1月には研究報告会を開催し、その後、各自のレポートをまとめて冊子にします。

この演習Iでは統計を利用します。高校時代に数学が苦手だった方もいると思います。でも、心配する必要はありません。研究したい内容が決まり、調査や実験方法が定まれば、自分の利用する統計分析法について自然と理解が深まります。自分の興味・関心のあることを大切に、課題を設定し、実験や調査を計画・実施するという一連の経験は、卒業後にも、自律的な学びへの意識やプロジェクトの企画・運営力として役立つことでしょう。一緒に研究しませんか。みなさんの応募をお待ちしております。

<実施言語> 日本語

<ゼミ独自の選抜方法について> なし

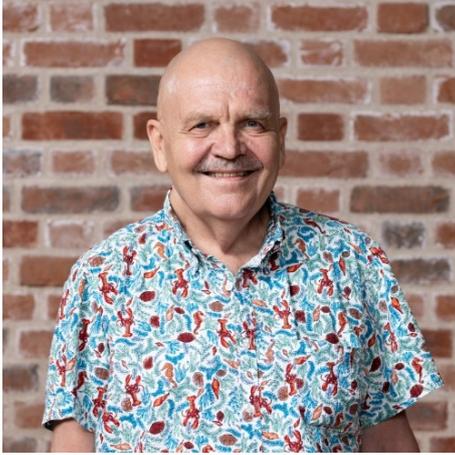
<演習Iと演習IIの連続性について> 演習Iでは第二言語習得に関する基本的な文献を読みながら、自分の興味や関心のある分野を探し、研究方法について考察を加えます。演習Iでの学びを深めたい方は、演習IIも履修してください。

<卒論の推奨について> 演習IIでは研究会での口頭発表と英語による卒業論文の執筆を目標とします。一緒に頑張りましょう。

D.L. Olson

D.L. オルソン

1)レトリックとパブリックアドレス 2)レトリック・マスコミ論・クリティカルシンキング



レトリック：言葉として「rhetoricとは古典ギリシア語から由来します。主に説得の過程に関する学問で始まりましたが、西洋の国々の社会の中で（特に政治と法律の世界）人の前に立って演説することが常用な役割を果たしてきました。この専門では演説する方法をはじめ、ほかの人がした演説の分析方法論も研究します。今の時代（特にマスコミ技術の発展に伴って）演説だけではなく公の場でのコミュニケーション現象に目を向けることも珍しくありません。

マスコミ論：上述に示唆したように現代は公の場のコミュニケーション現象の多くはメディア技術を通して伝わるものは少なくありません。それに当たってマスコミの社会の中の役割、技術の観点からどのようなメッセージ作成が可能であるか、その技術を利用しているからコミュニケーション現象としてどう違うかを探る必要があります。

クリティカルシンキング：これは上記の二つの専門分野を勉強するために不可欠な能力です。特にコミュニケーション現象を分析するのが中心になります。

<演習内容>

人間は表象（言葉や非言語メッセージ等）を使いながら相互的に影響を授受する。レトリックとは人間が多様な表象を利用しながら意図的に回りの人間・社会に影響を与えようとする過程である。ゼミではこのようなコミュニケーションの試みを分析する。分析の対象になるものは、典型的な例としてpolitical speeches, advertising等があるが、場合によっては石碑、建物、旗等もある。これまで、ゼミ生の中で、演説・宣伝のようなものを分析した生徒が多かったが、エッフェル塔・BGM・野球チームのPR・韓国での一人デモ等の分析もあった。各自、分析対象の選択はかなり自由であるが、分析するための観点（レトリックの観点）が重要である。

上記が最終的な目標ですが、多くのゼミ生がレトリックを始めて勉強すると思いますので演説の基本から始め、過去の優秀な演説を参考にしながら優れているものはどのような特徴あるかを見つめていきます。対象になる演説は西洋なものを中心にしますがそれに限りではありません。この演説を対象にしてゼミの中で演説の歴史背景と演説そのものを一緒に分析していきます。

また、分析するためにレトリック論からくる分析法を勉強するが、ものごとに対しての接し方、考え方、理解する方法も訓練する。上述したような課題について理解するために、レトリック論とともにcritical thinkingも学習する。そのために、皆さんが関心をもっている課題—社会問題・外交問題等・政治問題等—について考慮しながら議論していく。

オルソンゼミの大きな目標は皆さんのコミュニケーション能力の上達と人生に役立つcritical thinking能力を身に着けることである。

<実施言語> 日本語と英語も使うが、テキスト・使用プリントの多くは英語文献を使用

<ゼミ独自の選抜方法について> 演習申込書による判断

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について> 2年連続履修により学びが深まります。

<卒論の推奨について> 必須ではありません。

ユスチナ W. カシャ(Justyna Weronika Kasza)

翻訳演習:理論と実践: Seminars in translation: theory and practice



専門分野

現代日本文学・世界文学・翻訳学

専門分野の概要

私の専門分野は日本文学(主に戦後・現代)や、翻訳方法や理論における日本小説の読み方を探検することです。世界文学・翻訳研究では、世界の時代における国文学(日本文学と日本語文学の違い)に対する考え方の変化を調査しています。文学を通じた異文化コミュニケーションや、様々な形の翻訳が原文を豊かにし、どのように変容していくかの問題に興味を持っています。研究者としての私の長期的な目標は、世界文学とグローバル・スタディーズの枠組みの中で日本文学を再定式化する方法を理解し、日本の研究に新しい研究方法を実際に応用するために、グローバル・スタディーズで日本文学と言語を探求し続けていきたいと考えています。

<演習内容>

The course introduces students to leading theories and approaches in Translation Studies. The objective is to address theoretical issues and methods (linguistic, critical, cultural, political, ethical, historical) applicable to various types of texts used in class and to assess the significance of translation in the context of cross-cultural communication and global circulation of texts. The course also aims at helping students to develop their language skills (both in Japanese and English) and critically approach existing translations with the use of adequate materials and references. The course enables students to explore a wide range of practical areas of Japanese - English (both ways) translation through a close exploration of selected texts and independent work on associated tasks. The objective is to allow students to acquire and further develop skills, competencies and procedures applicable in the process of translation. Upon the completion of the course, students will become familiar with a range of digital and paper resources and a Computer-Assisted Translation Tool (CAT).

Sessions are divided according to the direction of translation into Japanese to English (J>E) and English to Japanese (E>J) with some degree of flexibility when appropriate. Each session consists of a variety of teaching items and associated materials are distributed in class.

<実施言語>

日本語と英語

<ゼミ独自の選抜方法について>

面接はしませんが、志望理由書は英語で提出してください。

<演習 I と演習 II の連続性について>

2年間連続で履修したほうが学びが深まるゼミです。

<卒論の推奨について>

推奨しますが、ゼミ論にすることも可能です。

イギリス帝国の歴史と英語圏文学



専門分野

英語圏文学・文化（コモンウェルス文学）、英語教育学、

専門分野の概要

四半世紀になろうという研究の出発点はイギリスのモダニズム文学の研究。T. S. エリオットの思想と文学の研究にはじまり、その後、時代と地域を拡大し、いまでは英語圏の文学と文化を幅広く扱う。産業革命を経て巨大な帝国に発展したイギリスは、政治、経済、文化、教育のさまざまな領域で植民地とヒト、モノ、情報の流れを制度化し、その過程で豊かな文化を形成した。この文化史の研究を通してグローバル・ヒストリーを読み解くことに関心がある。他方で翻訳家としても長く活動し、アカデミックな（つまりあまり売れない）書物の翻訳の仕事をつづけている。

<演習内容>

世界地図を見ながら歴史を説明できるようになる。これは、この演習の最初に示される目標である。大航海時代以後にヨーロッパ諸国はアフリカやアジアに進出し、ヒト、モノ、情報の新しい流れを形成した。イギリスは産業革命を経て強大な国家になり、多数の植民地を獲得し、広大な英語文化圏を築いた。イギリス帝国史の研究は、国境を越えた近現代史の動きを読み解くことである。たとえばイギリス帝国の拡大にのみ込まれたインドで、イギリスや日本はどう見えたか。そこで英語教育はどう発展したか。英語文化圏の多様な地域を視点として世界地図を見つめ直すと、グローバル化と言われる歴史の動きがけっして単純な進歩史観に収まらないことがわかる。この複雑な動きをとらえるテキストとして、演習では19、20世紀の英語文学テキストをとり上げる。テキストの背後にある歴史や文化の奥行をとらえ、世界地図を回し、想像力を駆使し、グローバル・ヒストリーを読み解くことで、多角的な世界観を形成する。

この演習で、情報の編集をとくに重視する。文章の推敲についてわかりやすく解説し、レポート課題の添削を通し、文章作成の方法と技術を丁寧に教える。名文を書くためには、名文とはなにかを知らなければならない。それを解説し、論じ、その意義を伝える。周知の通り、インターネットには感情的な悪文があふれている。文章の推敲を通して、論理的、理性的な文章を書く意識を高め、洗練された書き手になるよう指導する。

<実施言語>

講義を日本語で行ない、英語のテキストを使用する。

<ゼミ独自の選抜方法について>

面接なし。電子メールで連絡する。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

2年間の演習は連続するが、演習Ⅱの履修は自由。

<卒論の推奨について>

卒論はぜひ履修してほしい。研究内容だけでなく、資料収集と情報編集の技術、文体の形成など、卒論を通して学べることは山のようにある。

かねこ ゆきお 金子 幸男



ヴィクトリア朝イギリス社会／文化を理解する： イングリッシュネスとブリティッシュネス

専門分野 英語圏文学・文化（イギリス・文化・社会）、

専門分野の概要 私の研究分野は、「イングリッシュネス」（イングランドらしさ、イングランドのナショナル・アイデンティティ）と「ブリティッシュネス」（英国らしさ、ブリテンのアイデンティティ）です。特に田園／田舎のカントリーハウス（貴族のお屋敷）やコテージ（農民の家）がアイデンティティ形成に関わる様子を、小説、風俗画、風景画の中にみてゆきます。また英国王室やイギリス帝国にも関心があります。時代としてはヴィクトリア女王の時代（1837年～1901年）から第一次世界大戦の前まで（1914年）が中心です。

<演習内容>

「ヴィクトリア朝イギリス社会／文化を理解する：イングリッシュネスとブリティッシュネス」

19世紀ヴィクトリア女王の統治した時代（1837-1901）は産業革命が進んで科学技術は進歩し、都市化が進んだ時代、社会の改革が進んだ時代です。また世界に目を向ければイギリス帝国として大繁栄した時代でもあります。今でもイギリス人はこのヴィクトリア時代を郷愁の念をもって眺めます。したがってこの時代の社会と文化を理解することは現代イギリス社会を理解する手助けとなります。この演習では、当時の社会的・文化的事項（家族、都市生活、産業、鉄道、田舎、貧困、お金、教育、宗教、進化論、新しい女、世紀末、イギリス帝国など）を眺め、その中から「イングリッシュネス（イングランドらしさ）」や「ブリティッシュネス（ブリテンらしさ）」というアイデンティティのテーマが浮上してくる様子を絵画や物語の中にみてみます。

前期はこのようなヴィクトリア時代をジェレミー・パクスマン（Jeremy Paxman）の英語で書かれたテキストを使って学んでゆきます。このテキストにはヴィクトリア朝の日常の様子を描いた風俗画がふんだんに盛り込まれています。前期では、学んだ知識をもとにシャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』を翻訳で読んでもらい読書会を開きます。またその英語原文の一部を精読します。後期には、イギリス帝国の歴史を概説したアシュリー・ジャクソン（Ashley Jackson）の英語テキストを使ってブリティッシュネスがどのように世界に拡大していったかを眺めることになるでしょう。後期にも一冊、ジョゼフ・コンラッド作『闇の奥』という中編小説を翻訳で読み読書会を開きます。帝国主義や人種主義、ポストコロニアリズムについて学んだ知識を生かしてこの作品を読みます。この作品の原文の英語も多少は読み味わってみたいと思います。

皆さんにはレジュメ作成、討論を通じて、授業に積極的に参加してもらい、たとえばグループごとの話し合いの場も時にもてればと考えています。

金子ゼミの構成＝英語テキスト読解＋風俗画鑑賞＋読書会＋指定小説の一部の英語原文精読

主要英語テキスト：（前期）Jeremy Paxman, *The Victorians: Britain Through the Paintings of the Age* (BBC Books, 2010)；（後期）Ashley Jackson, *The British Empire: A Very Short Introduction* (Oxford UP, 2013)；これらテキストの理解をより深めるために、絵画・写真等の図版も使用します。

主要日本語翻訳書：シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア 上・下』（光文社古典新訳文庫）、ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』（光文社古典新訳文庫）、どちらも英語原文の一部はコピー配布。

補助英語テキスト：Martin Hewitt, *The Victorians: A Very Short Introduction* (Oxford UP, 2023)

参考図書：Krishan Kumar, *The Idea of Englishness: English Culture, National Identity and Social Thought* (Routledge, 2017)；Lynda Nead, *Myths of Sexuality: Representations of Women in Victorian Britain* (Basil Blackwell, 1990)；リア・グリーンフェルド『ナショナリズム入門』（慶応大学出版会、2023）、アントニー・D・スミス『ナショナリズムの生命力』（晶文社、1998）、クリシャン・クマー『帝国 その歴史的考察』（岩波書店、2024）、秋田茂『イギリス帝国盛衰史 グローバルヒストリーから読み解く』（幻冬舎新書、2023）

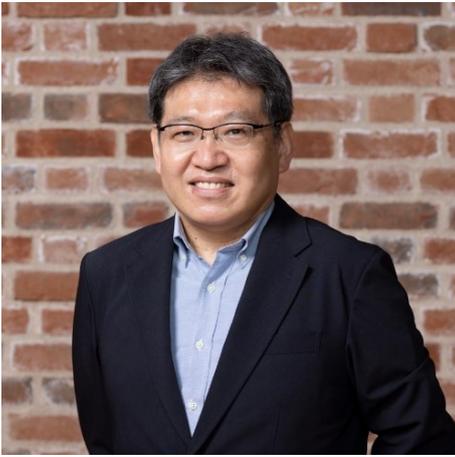
<実施言語>日本語

<ゼミ独自の選抜方法について>必要に応じて面接をする場合もあります。また希望者にも面接を実施します。

<演習 I と II の連続性について>特に強固な連続性はありません。

<卒論の推奨について>特に強く推奨はしませんが、希望があれば応じます。

アイルランドとはどのような国か？



専門分野

英語圏文学・文化（アイルランド文学・文化）

専門分野の概要

アイルランドが生んだ小説家ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）の短編集『ダブリナーズ』（1914）や彼の代表作である『ユリシーズ』（1922）を、アイルランド史の枠組みから読み解く作業を続けています。一方で、21世紀のアイルランド人作家にも興味があり、コラム・トビン、セバスチャン・バリーらの作品に描かれた「移民」「宗教」「階級」といったテーマにも注目しています。

<演習内容>

英国の左隣に位置し、北海道とほぼ同じ面積を有しながら、人口は500万人を少し超える程度のアイルランド。この国はジェンダーギャップ指数のランキング上位に位置すると同時に、国の裕福度を測る指数の一つである「一人あたりGDP」の数値においてもこの10年ほど十位以内に入り続けています。しかしながら、英国の「植民地」下にあった時期のこの地のカトリック信徒は公民権を制限され、19世紀半ばには「じゃがいも大飢饉」が起こったこともあり、長きにわたって多くの移民を米国などに送りだすに至りました。さらにはアイルランド国内に目を向けると、つい最近まで離婚や中絶が禁止され、女性の社会的地位は低く、その要因の一つはカトリック教会の教義にあると考えられています。このように、経済的にも、社会的にも苦境が続いていた国が、なぜ21世紀になって上述した指標のランキング上位国になったのでしょうか。

本演習ではこの「移民」や「宗派对立」というアイルランド特有の現象を取り上げ、それらがアイルランド社会においてどのように認識されていたのか、20世紀以降出版（公開）された短編小説（ジョージ・ムア、ジョン・マクガハンなど）や映画（『アンジェラの灰』など）から読み解いていきます。アイルランドという極めてローカルな題材を扱いますが、移民はグローバルな事象となっていますし、また宗教がもとで世界各地において紛争が勃発しています。時にはアイルランドという枠を超えて、21世紀の世界が抱える問題とも関連させながら考えていきたいと思えます。

この演習の授業スタイルは<学生による発表、教員による補足説明、全体討議>の3部から構成されます。発表は輪番制ですが、発表担当でない回も全体討議に参加することが求められます。拙い意見でも構いませんので、積極的に発言してみましょう。またグループ・ディスカッションや課外活動なども実施する予定ですので、その点を理解したうえで履修希望を出してください。なおゼミについて質問がある場合はkawahara[at]seinan-gu.ac.jp までメールで問い合わせてください（[at]を@に変える）。

<実施言語> 授業での言語： 日本語 テキストの言語： 英語・日本語

<ゼミ独自の選抜方法について> 志望書によって選抜します。

<演習Iと演習IIの連続性について> 2年間連続で履修することを前提として指導するつもりですが、演習IIの履修については自由です。

<卒論の推奨について> 推奨しますが、実際に卒論を執筆するかどうかは受講生の判断に任せます。

グローバル・フード・スタディーズ



専門分野

社会学（フランス社会論・思想史）

専門分野の概要

社会学の中でも、私は知識社会学という分野を主に専門としています。この分野は、社会の中で知識がどのように生産され、流通するのか、また知識が人々の思考や行動をいかに導くのかといった問題を取り上げます。私は主に、19世紀以降の社会において、精神医学や社会ダーウィニズム、優生学といった知がどのようなかたちで展開し、またどのような価値観を形成してきたのかという問題を考えています。言い換えれば、生物学的・心理学的なものの見方と、社会の捉え方つまり社会観との関係を探求しています。最近は特に、19世紀末から20世紀初頭にかけて労働者の栄養状態を調査した社会衛生学について調べています。広くは、食べることが社会の中でどのように管理されるのかという問題を考えているのですが、これは本演習のテーマとも密接に関連します。

<演習内容>

皆さんが日頃食べたり飲んだりするものの多くが、実は外国から輸入されていることは、皆さんもご存じでしょう。日本のような食糧自給率の低い国においては特にそうで、豆腐や納豆、醤油のような伝統食でも、材料の大豆は大部分が輸入に頼っています。またコーヒーは、南北回帰線のあいだの高地という地球上の限られた場所でしか生産できませんが、今や世界中で消費されています。コーヒーはアフリカのエチオピアが原産ですが、16世紀にアラビア半島のイエメンでイスラーム教徒に好まれるようになります。その後、イエメンを征服したオスマントルコがコーヒーを広め、17世紀後半にはヨーロッパにもたらされます。日本でよく飲まれるようになったのは20世紀になってからで、最近ではアメリカのシアトル発祥のコーヒー文化が席卷していますね。コーヒーに限らず、今は世界中の食を楽しむことができます。大学のある西新でも、中華料理や韓国料理はもちろん、フランス料理やイタリア料理、インド料理やメキシコ料理、さらにはペルー料理の店まであります。

このように、グローバル化によって現在の食は多様化していますが、他方で逆の現象も生じています。これはあまり気付かれていないことですが、人間の食べる動植物種の数は減少し、ごく限られた動植物の種—3種の動物（牛/豚/鶏）と3種の植物（小麦/稲/トウモロコシ）—が世界中で大量生産されています。20世紀後半の「緑の革命」によって、単位面積あたりの収穫量の多い種への転換が行われるなかで、伝統種がもはや植えられることなく絶滅しました。19世紀にアメリカで育てられていた7100種のリンゴのうち、6800種が絶滅したと言われています。

このように食を歴史と地理のなかで捉え、食を通じて現代社会の問題を考えるのが本演習の狙いです。参加される皆さん自身が、本や新聞・雑誌、インターネット、実体験を通じて、食材や調理法・食事法、食文化をめぐるトピックを調べ、発表するかたちで演習を進めていきます。

<実施言語> 授業は日本語で行う。使用するテキストはフランス語あるいは英語、日本語。

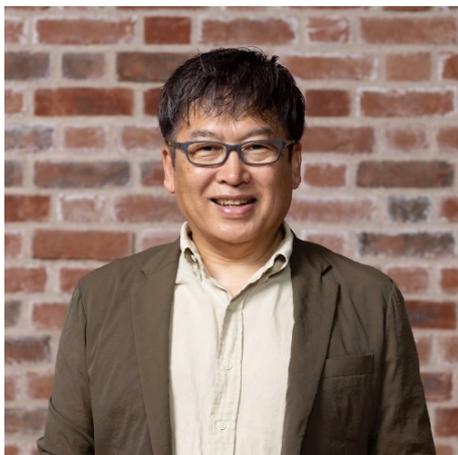
<ゼミ独自の選抜方法について> 志望動機書に基づいて行う。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について> 内容は連続するが、それぞれ単独の受講も可能。

<卒論の推奨について> 演習Ⅱでは卒業論文集を作成するので、強く推奨する。

きよみやとおる 清宮 徹

社会と組織におけるコミュニケーション問題を考える(視座と方法)



専門分野

コミュニケーション学 (組織)

専門分野の概要

私の研究の焦点は、組織の内部や組織に関わる諸問題が、どのようにコミュニケーションを通じて現実化するかにあります。特にポスト構造主義の視座からディスコース(言説)に着目し、組織の当たり前を疑い、日常に潜む問題を分析します。ディスコースを社会科学方法論の質的研究の中心に据える試みを展開、2019年に『組織のディスコースとコミュニケーション』を出版、日本コミュニケーション学会賞を受賞。現在の研究関心は、不祥事および危機の社会的構成、企業のヘゲモニー、被災地のレジリエンス、組織のアイデンティティとパワー。近年、組織のコミュニケーションとジェンダー問題の関係について取り組み、組織のジェンダー不平等を構築し続ける「ジェンダー化」のコミュニケーションと社会関係の「交差性」について研究プロジェクトを展開。経営・組織における新たなアジェンダを模索します。

<演習内容>

このゼミでは、企業や病院、学校、NPOといった組織におけるコミュニケーションを学びます。そこで演習Iでは、次の2つの目的を設定します。1) 実社会でも活かせるグループ・コミュニケーションの基本を習得すること。2) 社会や組織を深く観察することができ、多様で複雑な問題を分析的に理解できる洞察力を養うこと。第1の目的のため、グループ・コミュニケーションの理論と実践を学びます。個別テーマとしては、リーダーシップ、ディスカッション、問題解決と意思決定、対立、交渉などです。実習やシミュレーションによる学習を含み、対人スキルの向上を図り、コミュニケーションのスペシャリストになることを目指します。第2の目的のために、2つの方法を取り入れます。前期は、インタビューとフォーカスグループの手法を実践し、特定のテーマについて取材します。後期は、フィールドワークを中心とした事例研究を中心に学びます。本ゼミでは、複雑な社会的現実がどのように作り出されるか、その過程を理解することを重視します。現実を形作る言語化のダイナミズムに注目しながら、コミュニケーションと社会的プロセスを、言説の視点から考察していきます。グローバル化とネオリベリズムが進展する中、現代社会はより複雑なコミュニケーション問題が目の前で起きています。これらを他人事とするのではなく、自分のこととして問題解決に臨む姿勢を育てたいと思います。

<実施言語> ゼミは基本的に日本語で行います。ただし、海外の大学と共同授業を行う際(COILなど)は、英語を使用します。また教科書は日本語と英語の両方を使います。

<ゼミ独自の選抜方法について> 応募者は必ず、清宮ゼミの専用申込を提出してください。そのうえで、外国語学部が指定する定員を超えて、応募者数が多数の時は、面接による選抜を行います。清宮ゼミを希望する学生は、清宮までメールしてください。専用申込書を送りますので、それに記入のうえ、メールで提出してください。なお選抜の際は、演習IとIIともに参加する学生が優先されることをご了承ください。

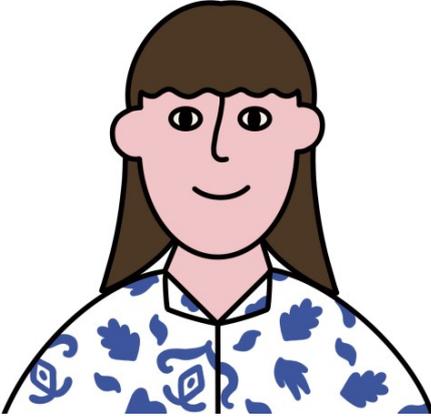
<演習Iと演習IIの連続性について> 清宮ゼミでは、演習IとIIを密接に連動させています。演習Iでは、組織コミュニケーションの基礎や社会を理解する考え方を学び、同時に基本的なビジネススキルの習得を目指します。演習IIでは、これらの基礎知識をもとに、社会、ビジネス、組織に関する特定のテーマについて、実践的な研究を行い、ゼミとして論文集にまとめます。

<卒論の推奨について> 演習IIではゼミ生全員で共同研究を行い、ゼミ論文集を作成します。また、それを演習Iのゼミ生に発表します。これは卒業論文(卒論)ではありません。卒論は基本的に自由です。4年間の総まとめとして、卒論を作成したい学生は、別に登録してください。その上で個別指導しますので、関心のある学生はぜひチャレンジしてみてください。

AIから学ぶデータマイニング入門

専門分野

フランス語学（コーパス言語学・語彙論）、フランス語教育学、



専門分野の概要

フランス語学習者のスピーキングの特徴について、コーパスと呼ばれる規模の大きな言語資料を用いて、使用する語がどのような特徴を持つのかを分析しています。そして、スピーキングを上達させるためにはどのような語彙や表現を身につければいいかを研究しています。

<演習内容>

ここ数年でAI技術が格段に進歩しました。外国語も翻訳機を使用すればほとんど正確と言っていいレベルの訳を得られるようになり、ますます外国語学部で何を学ぶかが問われる時代が来ました。大学で外国語のスキルを磨くだけでは卒業後に活躍できる場はますます少なくなることでしょう。そこで、本ゼミではデータマイニングを基礎から学習します。データマイニングとは、大量のデータから文書の傾向や特徴を見つける手法のことです。前期には、Pythonというプログラミング言語を基礎から学びます。同時に、データ分析に必要な概念を学習するため、コーパス言語学に関する文献を読みます。後期からは大規模データを使用して自身の興味のあるテーマについて言語分析を行います。言語教育、マーケティング、社会学、マスコミ、文学など、幅広い対象が考えられます。対象言語は、フランス語、英語、日本語のいずれかとします。ChatGPTを使用してプログラミングを行っていきますので、プログラミング言語に初めて触れる人こそ大歓迎です。外国語学部で学んだことの集大成として、外国語を学ぶ対象から研究対象とし、自分で見つけたテーマについて真摯に向き合って研究を行い、論文として形に残してみませんか。

<実施言語> 日本語（『ベーシックコーパス言語学』石川慎一郎、ひつじ書房）

<ゼミ独自の選抜方法について> なし。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

2年間連続で履修することで連続的な学びが得られますので、連続して履修することを推奨します。しかし、演習Ⅰを履修していなくても問題なく論文執筆が行えるよう適宜指導しますので、演習Ⅱからの履修も歓迎します。

<卒論の推奨について> 推奨する。

ことばの仕組みと意味



専門分野

英語学（統語論）、日英対照言語学

専門分野の概要

英語と日本語を中心に、文法と意味に関わる研究を行っています。英語ならば語順、日本語ならば助詞（てにをは）という文法上の規則が文の意味に大きな影響を与えますが、語順・助詞のような形と意味の関連性を研究テーマにしています。ことばの規則と意味は、地域や時代、環境等によって変化するものですが、そのような変化も考察の対象としています。例えば、アイルランドやカナダ東部で使用される英語方言、福岡・佐賀・熊本・長崎で使用される肥筑方言、若者や特定のグループで使用される集団語、幼児や学習者による誤りを含む発話等に着目し、それらのことばに、どのような特徴が見られ、標準形式とどのように異なるのかといった点にも大きな関心があります。

<演習内容>

「ことばの仕組みと意味」について、論理的に、科学的にアプローチしていきます。

<前期> 英語学・日本語学の書籍を講読しながら、「ことばの仕組みと意味」に関する基礎と発展を学びます。「英文法」や「英語学概論」等の科目で扱ったトピックを更に深める形での学びを行います。章・節毎に担当者を決め、ハンドアウトを作成した上での発表形式で進めていきます。興味深いデータや現象があったとしても、基礎力がなければ、適切にアプローチすることはできません。文献講読を中心に基礎力を培いながら、言語データを的確に捉える上での洞察力も高めていきます。

<後期> 受講生各自が興味を持ったトピックを選び、発表を行うことで、受講生による主体的な学びを行います。各自が選んだトピックに関連する文献を探し、要約・考察を含むハンドアウトを作成した上で発表を行い、全体で議論を行うという形式で進めていきます。「基礎演習」から培ってきた、文章作成のマナー・規則に従いながら、論理的・批判的考察を行う力が試される場になります。前期の学習内容も踏まえながら、分析に疑問点・問題点がないか、分析を支持する他の根拠や例がないか、他に有効な考え方がないか等、しっかりと考えながら議論を展開していくことが期待されます。

<実施言語> 授業は、日本語で行い、前期に講読する書籍も日本語で執筆されたものを使用します。後期の発表で使用する文献は、日本語に加え、英語で書かれたものを選んで構いません。

<ゼミ独自の選抜方法について> 応募者には、志望動機や学びたい内容等について、簡潔にオンラインフォームで回答してもらいます。応募者多数の場合、この回答をベースに、選抜を行います。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について> 演習Ⅰでの学びを深めたい場合、演習Ⅱも履修してください。2つの演習に連続性はありませんが、演習Ⅱのみを履修する場合、演習Ⅰで言語学を専門にする先生のゼミ（指導分野コードLNGのゼミ）を受講していることが望ましいです。

<卒論の推奨について> 必須ではありませんので、執筆するか否かは、各学生の意思に任せます。これまでに指導担当した卒論のテーマ（前任校での指導）は、QRコードのリンク先資料を参照してください。このゼミが自分に合っているかどうかを確認する目安にもなるはずです。



Thierry Trubert

ティエリー トリュベール

映画・絵画・写真を通して観た食文化



専門分野

フランス語学（言語処理論）、言語学・映画論

専門分野の概要

2012年よりスペイン語・フランス語辞典の編纂に着手。現在は、収集した現代フランス語及びスペイン語を体系的に整理した現代仏西辞典を編纂中。近現代の様々なメディア（新聞、ニュース、ブログ、SNS、映画等）で使用される言葉の意味や、従来の辞書に掲載されていない近年の社会情勢に関連する語彙や、異文化理解のために必要とされる新語や新しい表現に着目し、口語辞典を編纂している。

<演習内容>

ユネスコ無形文化遺産にも登録されている「フランス人の美食術」。この演習では、フランス含めたヨーロッパ諸国および日本の映画・絵画・写真において食事に関するシーンを題材とし、19世紀から現代まで、時代、階級、年齢などによって、食事内容、習慣、作法がどのように変化しているかについて研究します。題材を観る前に、演習のテーマに関連した基礎知識を解説します。鑑賞後は、各々が感じたことについて意見交換を行い、その場面に登場した人物の具体的な会話や行動をもとに知識を深めます。本演習は、文化芸術に関心がある人、フランス映画の世界観に共感できる人に興味のある学生向けです。

メディアの中の近現代社会を通して、フランスとヨーロッパ文化を研究し、相違点を分析します。具体的には、昼食と夕食、平日と週末の食事、19世紀のフランスとデンマークの食事などを比較し、食生活や作法などが社会階級や異文化、宗教などの様々な要因によって形成されていることを学びます。

題材例「舟遊びをする人々の昼食」（1881年）。ルノワールの食事をテーマにした絵画。1枚の絵画だけでも当時の様々な文化を考察することが出来ます。食事の場が、人間同士の社会的関係を形成する上で重要であり、男女間の仕草等から19世紀末時点で女性の地位が確立し男女間で対等な文化交流が行われていたことが読み取れます。

日本では未公開の映像教材も使用します。大学の図書館に所蔵されている映像作品も、各自の関心に合わせてその都度紹介していきます。

映画や絵画はフィクションの世界ですが、その中でもリアリティを発見することができます。自分なりの視点や問題意識を持って映画を観ることで、より深い味わいを追求し、見識を広げてほしいと思います。

<実施言語>

French, English and Japanese are the 3 languages generally used to communicate in this seminar.

<ゼミ独自の選抜方法について>

Please write your motivation letter in English or in French

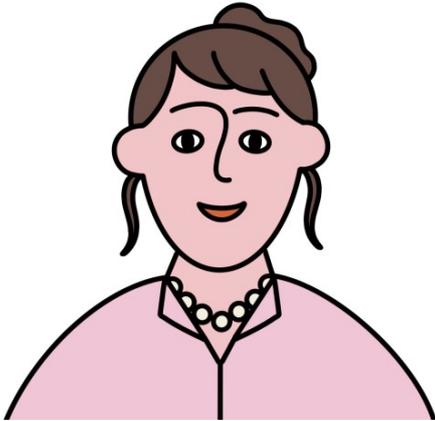
<演習 I と演習 II の連続性について>

Seminar I and Seminar II are entirely different so there is no need to take both.

Cynthia Daugherty

C. L. ドーハティ

「オリエンタリズム」と「カウンター・オリエンタリズム」: 美術作品と広告、映画で学ぶ



専門分野

言語文化学 (文化交流史) 英語教育学

Comparative culture, History of English education

専門分野の概要

I am interested in the history of exchanges between Japan and western countries. As such, I have researched Rimpa art and its evaluation by westerners, orientalism, and the history of English education in Japan. Concerning the latter, I am particularly interested in American and British teachers who have been employed in Japan as English teachers. Currently, I am studying an American woman named Elizabeth Vining who was in Japan from 1946-1950 as the tutor to Crown Prince Akihito.

<演習内容>

In my seminar, we focus on orientalism as it relates to Japan. orientalism is the term to explain the general stereotypes that Western countries have made about Asian countries. By studying the history of orientalism through the example of Japan, students will gain a framework for understanding other cultures, as well as confidence in identifying human bias when people encounter other cultures. They will also gain a deeper understanding of the history of Japanese and Western exchange.

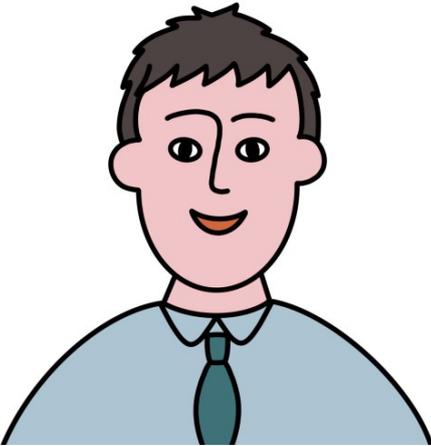
本ゼミでは、「オリエンタリズム」を日本文化との関連において考察する。オリエンタリズムとは、西洋諸国が古代よりアジア諸国に対して持つステレオタイプを説明する用語である。オリエンタリズムは自文化以外の文化を他者として扱う一つの例であり、自分の文化以外の文化を特異なもの、劣ったものとして定義する一つの例である。

ゼミの前半は、西洋諸国が日本に対して持つステレオタイプが、明治時代から現在までいかに変化していったか、或いは、いくつかの例においては不変であったかを検証する。オリエンタリズムのステレオタイプには、アジアの人々と文化は感情的で、合理性に欠き、子供っぽく、謎めいていてミステリアスといった考え方が含まれるが、本ゼミでは、その実際の例を、美術作品や広告、映画の中で発見していく。授業ではまず、講師が示した例と映像について議論と分析を行い、次に、受講者が自ら広告や映画を調べて発表を行う。授業で扱う映画については、ゼミのメンバーで話し合っ決めて決める予定である。ゼミの後半は日本における「カウンター・オリエンタリズム」について学ぶ。「カウンター・オリエンタリズム」とは、西洋で作られた日本に対するステレオタイプを、日本がいかにしてその「強み・メリット」へと転換したかを考える学問である。授業は、主に広告や映画からの例を取り扱うが、ここでも講師が例を示し、それを基に受講生は広告と映画の分析を行い、発表する。日本文化に対するオリエンタリズムの歴史を学ぶことは、他の文化を理解する枠組みを体得することになり、また、異文化に遭遇した時に人々が持つ偏見を見分ける力にも繋がる。更に、ゼミでの課題を通して、ゼミ生たちは批判的思考力と知的自立力を鍛えることになる。

<実施言語> Most books and articles are in English, but there are some in Japanese.

<ゼミ独自の選抜方法について> No interview is required.

<演習 I と演習 II の連続性について> Related, but not sequential.



専門分野

英語学（音声・聴解研究）

専門分野の概要

第二言語学習者の音声習得プロセスの一端を解明することを目標に以下のテーマの研究をしています 1) 英語のプロソディーが、文理解時にどのように利用されるのか、2) 音声を知覚する際に、話し手の目や口の動きをどのように利用するのか、3) 英語シャドーイング遂行時の神経基盤を解明するため、脳活動測定装置（fMRI）を用いた研究

<演習内容>

このゼミでは、(1) 英語音の仕組みの基本的な理解、(2) 音声知覚・理解・習得プロセスについて研究を行います。(1) 英語音声の仕組み：1つ1つの母音や子音の調音の仕方（口や舌等の動かし方）についてMRI動画などの視覚・聴覚資料を用いて、日本語の調音動画と比較しながら理解を深めます。さらに、英語音声を音響分析することで可視化し、個々の音声に含まれる特徴的な音響成分について理解します。さらに、リズム・イントネーションといった英語プロソディーの特徴について、日本語との比較を行います。研究テーマと成り得る題材は、日常生活に溢れています。例えば、有名人のスピーチ音響分析、言い間違いが起こりやすい音配列、音の響きと商品名・男女の名前の関係、音の響きが味覚・嗅覚等に与える影響、音符と日英歌詞の関係、日本人英語学習者の英語リズムの特徴などが挙げられます。(2) 音声の理解・習得のメカニズム：こどもや第二言語学習者がどのように音声を知覚・理解・獲得するのか、その心理メカニズムを探ります。例を挙げると、リスニングの際、聞き手は、受動的に音声を聞いているだけではなく、脳内でその音を発音していることが様々な研究で示されています。さらに、対面で話を聞く際には、聞き手は話し手の口元の情報を利用して、脳内で発音イメージを形成しています（新生児でさえ、養育者の口元の動きを注視して、養育者の声を脳内で模倣しようとしています）。一見、音声とは無関係に見える、黙読の際にも、読み手は脳内で文字を音声に変換（発音）し、その音声情報を理解に役立てていることが示されています。このような音の知覚・理解にまつわる心理メカニズムとそれに基づく外国語習得方法について皆さんと一緒に考えます。例年学期末に、皆さんに研究内容を、他大学との合同ゼミで発表して頂いています。

<実施言語> 日本語

<ゼミ独自の選抜方法について> 面接なし

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について> 2年連続履修により学びが深まります。

<卒論の推奨について> 必須ではありません。

ふじのこういち 藤野功一

アメリカン・モダニズムと大衆文化



専門分野

英語圏文学・文化（アメリカ文学）、アメリカン・モダニズム／ウィリアム・フォークナー

専門分野の概要

20世紀のアメリカ文学を代表する作家、ウィリアム・フォークナー（1897-1962）の文学作品を研究しています。フォークナーはその生涯にわたって、アメリカン・モダニズムを代表する前衛的な作品を次々と発表しました。同時に、アメリカの大衆文化の様々な要素をその作品の中に取り込んでいます。フォークナーはその独特の技法で、それぞれに異なるバックグラウンドを持つ多様な存在を自分の作品の中に取り込み、それらが一時的にでも互いに平等な関係を築こうと苦闘する姿を描き出しました。フォークナーの作品を読み解くことによって、現在の国際社会における人間同士の関係をより良い方向へ導くヒントが得られるのではないかと考えています。

<演習内容>

演習の前期では、ウィリアム・フォークナーの生まれ育ったアメリカ南部の歴史的、文化的背景を紹介したのち、フォークナーの短編と、それに関連する大衆文学を読みます。最初は日本語で議論をしながら、徐々に英語でも自分の主張を表現でき、議論できる力をつけていきます。後期も引き続き、文学の背景を知るために映画や大衆文化について学びながら、フォークナーの作品（中編及び長編を含む）を読み、モダニズムの技法とアメリカ大衆文化との関連についての認識を深め、主に英語で議論していきます。学生は一年間を通して、アメリカのモダニズムと大衆文化の関係についての歴史的、文化的背景を学び、同時に、文化的にも、経済的にも差異を作り出そうとする社会の中で、個人間の平等を実現するにはどうしたら良いかを、様々なテキストや文化事象を学ぶことによって考えます。その上で、現在でも生じている様々な問題について、しっかりと自分の主張に基づいて英語で議論することのできる力をつけることを目標に、各自の課題を探究します。このゼミを通じて、自分以外の個人と平等な関係を作り出す知性を身につけ、情報や意見を交わして生まれた個人間の平等な関係が、それぞれの人格形成に深い影響を与えることを実感してもらえればと思っています。

<実施言語>

授業では学生の実力に応じて日本語と英語を適宜併用。使用テキストの言語は英語。

<ゼミ独自の選抜方法について>

志望書により選抜。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

演習ⅠとⅡは連続して履修した方がより理解が深まります。

<卒論の推奨について>

卒論を推奨します。

Richard Hodson

リチャード ホドソン

Shakespeare on page, stage, and screen



専門分野

英語圏文学・文化（イギリス文学）、英語教育学

専門分野の概要

専門は、イギリス文学と外国語としての英語教育です。イギリスの大学院では、英文学、特にルネサンス期の演劇、つまりシェイクスピアの時代とその後登場した劇作家を対象に博士論文を書きました。最近では、現代イギリス小説の中でもカズオ・イシグロとヒラリー・マンテルの小説を中心に研究しています。英語教師として日本に来てからは、ユーモア研究やユーモア能力のトレーニング実践にも興味を持つようになり、その分野の研究もしています。

<演習内容>

このゼミでは、ウィリアム・シェイクスピアの戯曲を学びます。授業では、戯曲を英語で読み英語で議論します。また、戯曲の舞台化、映画化されたものをいくつか観ます。これらの脚色作品には、シェイクスピア劇場の雰囲気や技法を忠実に再現しようとするものから、シェイクスピア時代の英語はそのまま残しつつも舞台演出を現代映画様式に変更したもの、シェイクスピアのプロットやキャラクターを現代風に再設定したもの、あるいは原作とは全く異なる国や文化に再設定されているものがあります。劇を理解するための最良の方法は、劇を演じてみることです。ですから、授業では、劇中のシーンを自分たちで脚色し、練習し、演じてみます。このゼミは演劇の授業ではありませんが、人前で演技をし、演出家のように自分で考え実際にやってみようとする意欲は、このゼミに参加するための重要な条件のひとつです。ゼミ生は、定期的にグループ・プレゼンテーションを行い、劇のプロット、テーマ、技法をまとめ、それに関するディスカッションをクラスに提起することを求められます。また、Moodleや小テストを通して、定期的に学習内容を復習します。学年度末には関連する分野について研究発表を行い、最終報告書を作成します。これらの活動により、演習IIの個人研究、発表、卒業論文に向けた準備を始めることができます。

<実施言語>

テスト、プレゼンテーション、レポートを含むゼミは英語で行われます。英語学習、プレゼンテーション、クリティカルシンキング、パフォーマンススキルを向上させたい学生に、多くのチャレンジの機会を提供します。

<ゼミ独自の選抜方法について>

なし。

<演習Iと演習IIの連続性について>

演習Iと演習IIで扱うテキストが異なるため、演習IIの選択時に別のゼミから移動しても問題ありませんが、2年間連続で履修したほうがゼミについていきやすいです。

<卒論の推奨について>

推奨しません。卒論を書く場合は、英語で書きます。

みやけあつこ 三宅敦子

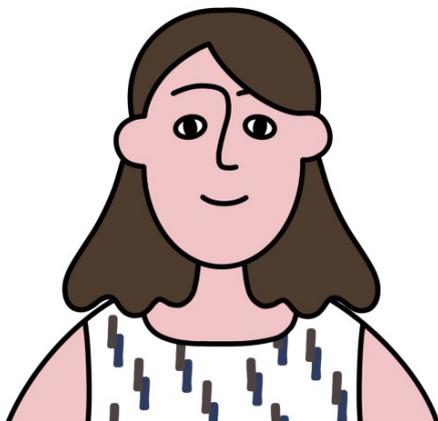
19世紀のコミュニケーションをイギリス文学で学ぶ： *Pride and Prejudice* 輪読

専門分野

英語圏文学・文化（イギリス文学・文化）

専門分野の概要

専門は文化的文脈における19世紀のイギリス文学（特に小説）研究。19世紀のイギリス小説に表象された19世紀イギリス社会に関心を持っています。



<演習内容>

この演習では、19世紀初頭に小説を執筆していた女性作家Jane Austen（1775–1817）の小説*Pride and Prejudice*（1813年出版）を取り上げます。この小説の英語の原典を、日本語の翻訳の助けを得ながら分析します。*Pride and Prejudice*は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリス社会を舞台とし、職に就き自立することが不可能だったため結婚が生きる術だった女性登場人物を中心に、ジェントリー層の登場人物たちの人生模様を描いた小説です。男女の登場人物たちによる結婚相手探しの会話を中心としたこの小説は、イギリス文学の中でも人気が高く、何度も映像化されていますが、このゼミでは、この小説を文字と言葉で構築された世界として味わいましょう（注意：ゼミでは映画は見ません）。授業は輪読形式（発表担当者が担当箇所のポイントを解説、他の学生が質疑応答で授業を進める、発表担当者は輪番制）で進めますので、予習（辞書を使って原典を読む）は毎週必要です。英語は慣れれば比較的理解しやすいものの、日本文学でいうところの古文にあたりますので、よい辞書と根気・忍耐力は必要です。せっかく大学に入ったのだから、しっかり学び英語の読解力を伸ばしたいという方は大歓迎です。文学作品として残された、家族や知人間の人的ネットワークの中で繰り広げられる当時のコミュニケーションを一緒に分析しながら、イギリス小説の醍醐味を味わいましょう。

使用するテキスト：Jane Austen, *Pride and Prejudice* (The Norton Library, 2022) / 新潮文庫『自負と偏見』（小山太一訳）または中公文庫『高慢と偏見』（大島一彦訳）

<実施言語>

日本語（使用するテキストは英語）

<ゼミ独自の選抜方法について>

なし。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

演習Ⅰでは小説*Pride and Prejudice*そのものを読み、演習Ⅱでは演習Ⅰで取り上げた小説*Pride and Prejudice*に関する研究論文を読む予定です。従って、演習ⅠとⅡの連続性は非常に高く、演習Ⅱのみの履修は勧めません。逆に小説そのものの輪読は演習Ⅰで完結する予定ですので、演習Ⅰの履修だけでも小説を楽しむことは可能な授業設計です。

<卒論の推奨について>

推奨します。4年生で演習Ⅱを履修した場合、*Pride and Prejudice*について卒論またはゼミ論を執筆することになります。

Akira Miyahara

宮原哲

「コミュカが高い」の理解と実践



専門分野

コミュニケーション学（対人・医療）

専門分野の概要

家族、友人、教師と生徒、医師と患者などの対人コミュニケーションを異文化比較することによって日本の特徴を明確にできるはず。

<演習内容>

就職活動では、「コミュニケーション能力が最も大切」と言われますが、「コミュカ」が何を指すのか、企業も政府、学校もよく理解しないまま言葉が独り歩きしています。この演習の目標は、

- ①人間コミュニケーションの本質の基本的知識の習得、
- ②さまざまな場面で有効なコミュニケーション力の理解と習得、
- ③コミュニケーションは課題解決力であることの理解と実践、です。

これらの目標を達成するには人間の「シンボル活動」の特性を理解する必要があります。この演習では、日常の社会事象に目を向け、好奇心の表れである「なんか変！」に始まる問題解決の実践を目指します。講義、ディスカッション、「データ」収集のためのフィールドワークを通して、実際の状況（context）での人間関係を学びます。

この演習は主に「個人リサーチ」と「グループ・プロジェクト」から成ります。学内外で実施されるグループ活動に応募し、プレゼンテーションのコンテストなどに参加するなど、学問と実践を兼ねた活動を展開することに努めます。

<実施言語>

日本語7割、英語3割（テキストは英語7割、日本語3割）

<ゼミ独自の選抜方法について>

面接を行う予定。失敗をおそれずに、自分自身の人間関係やコミュニケーションを客観視し、何にでも積極的に挑戦する人を優先します。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

連続して受講することによって深い学びを得ることができるが、演習Ⅱの受講は各自の判断

<卒論の推奨について>

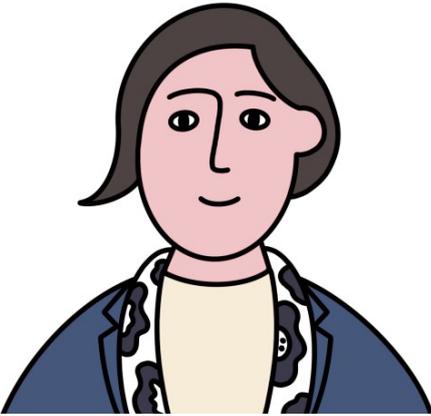
演習Ⅱでは卒論を推奨します。また、演習Ⅰ、および演習Ⅱでは「ゼミ論」（個人リサーチ）を課します

みやもとけいこ 宮本敬子

アメリカ映画・文学における人種・階級・ジェンダー・ セクシュアリティ表象

専門分野

英語圏文学・文化（アメリカ文学・映画・視覚芸術）



専門分野の概要

19世紀半ばから現代までを中心に、アメリカ文学、映画・絵画などの視覚表象と文学との比較研究、そして文学や芸術を分析する視点として、精神分析学、批判的人種理論、ジェンダー・セクシュアリティ研究などを行っています。交換留学生として1年間アメリカで過ごした経験から、移民国家アメリカの文学や芸術に興味を持つようになり、その後ニューヨーク州立大学大学院で比較文学を学び博士号を取得しました。文学研究は、英語力、論理的思考力、知識、教養という点で皆さんを成長させてくれるだけでなく、芸術作品として皆さんの心を癒し、魂を育み、人生に希望を与えてくれます。学生の皆さんには、これからますます多様性が重んじられる社会において、「他者の物語」に開かれた自分自身の物語を紡ぐ力をつけてほしいです。

<演習内容>

アメリカ映画120年の歴史をたどったテキスト、*America on Film: Representing Race, Class, Gender, and Sexuality at the Movies* (Blackwell, 2021) を用います。*America on Film*はフィルム・スタディーズのロングセラーとなっているテキストですが、20-21世紀アメリカの歴史、社会、文化の変遷を鮮やかに分析しており、人種、ジェンダー、階級、セクシュアリティ、そして（タイトルには入っていないが近年加えられた）ディスアビリティという、現代社会の課題ともいえる問題について考察するために必要な、さまざまな方法論の良き入門書ともなっています。テキストは映画が中心ですが、映画化・ドラマ化されたアメリカ文学作品も取り上げ、文学と映像表現の関係（アダプテーションやインターテクスチュアリティ）についても考察を深めます。ゼミは、グループ・プレゼンテーションを中心に進めます。発表担当の学生は、担当箇所の要約および解説、さらには問題点などを指摘した資料を作成し、発表・質疑応答を行います。発表者以外の学生はテキストを読み、映画を鑑賞し、ディスカッションに積極的に参加してください。プレゼンテーションやディスカッションの方法、資料収集の仕方、レポート・論文の書き方等を学び、4年次のゼミ論作成に備えていきましょう。

<実施言語>

授業は日本語中心になりますが、テキスト・参考文献は英語と日本語を使用します。

<ゼミ独自の選抜方法について>

来るものは拒まずの方針ですが、ゼミは少人数教育の場ですので、やむをえず選抜が必要な場合は面接をする予定です。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

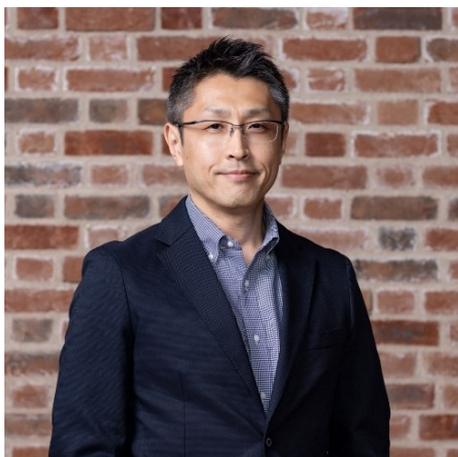
2年間連続で履修したほうが、学びが深まるゼミです。

<卒論の推奨について>

卒論は必須ではありません。大学での学びの集大成として卒論を書きたい、という意欲的な方には丁寧に指導します。

やまだともひさ 山田智久

多文化共生社会における社会課題を見つける



専門分野

日本語教育（教育学、協働学習）

専門分野の概要

私の専門領域は、教育学と協働学習です。教育学では、主に教育分野におけるICT/AIの望ましい在り方とはどのようなものかについて検証しています。協働学習では、異なる背景を持った参加者（留学生と日本人学生のケースが多いです）と共通のゴールを目指すPBL（Project Based Learning）型授業において、どのような気づきや学びがあるのかについて実践を通して調査を行っています。

<演習内容>

演習のゴールは「多文化共生社会における社会課題を見つける」で、キーワードは「外国人、多文化共生、ICT、社会実装」の4つです。

現在私たちの身の回りの生活では外国人が急激に増え、福岡県では約60人に1人が外国人という状況です（福岡県データブック2023年度版より）。国策の影響もあり、今後も在留外国人は増え続けます。このような環境を「多文化共生社会」という言葉で表すのは簡単です。しかし、実際に言葉や文化的背景が異なる人と協働するのは思いのほか大変です。このことを身をもって体験してもらうことが本演習の大きなテーマです。

授業では、文献購読を通して国内外の移民政策や多文化共生事例についてしっかりと学び、行政や企業への聞き取り調査を行います。調査をもとに学生視点での社会課題を明らかにし、その課題を解決するにはどのような社会実装が必要なのかを考え、実際の行動に移します。これらの過程で多文化共生社会についての理解はもちろん、リサーチスキル、プレゼンテーションスキル、行政・企業との交渉スキルを学びます。ちなみに過去の履修学生は福岡県糸島市、福岡よかトピア国際交流財団との協働事業を行ってきています（下段のQRコード参照）。

この演習は学生が自分たちで考えて動かなくてはいけない高負荷な内容となっています。教員はあくまでも支援者として関わります。将来は国際機関で働きたい、教員になりたい、何か社会貢献をしたい、学生時代に何か大きな挑戦をしてみたい！そんな学生に履修してほしいです。

<実施言語>

日本語・英語です。

<ゼミ独自の選抜方法について>

慣例的に現在の履修生が次の年度の学生の選考を行います。彼・彼女らが考える「この演習に向いている学生像」については下段右のQRコードを参照してください。なお志望理由書は枚数制限なし、写真などを入れて人物像がわかるようにしてください。

<演習ⅠとⅡの連続性及び卒論の推奨について>

演習Ⅰは共同での学び、演習Ⅱは個人での学びに主眼を置いています。二つの演習の継続履修が望ましいです。なお演習Ⅱ履修者には卒論またはゼミ論の執筆を強く推奨します。

<卒論の推奨について>

演習Ⅱ履修者は卒論執筆を強く推奨します。



世界における環境意識について学ぼう



専門分野

社会学（アメリカ社会論・人種とエスニシティ）、比較社会、マイノリティ研究、CLIL

専門分野の概要

もともとは、アメリカ研究という分野の出身ですが社会学をアメリカの大学院で最初から学び直しました。そして、現代アメリカ社会のマイノリティに係る問題を主に研究してきました。具体的には同性婚、フィリピン系移民看護師、ヒスパニック系日雇い労働者、ワーキングセンター（NPO団体）などです。もう一つ取り組んできた研究はCLIL（内容言語統合型学習）です。主に、アメリカ社会に係る英文（水産物管理、食品偽装、魚種のリブランディング事業）を日本語で読む際のポイントの整理、日本の時事問題を英語でどのように表現するかなどを研究する大学間プロジェクトに参加してきました。海洋管理に係る文献を読んできた影響で、最近では「外国からの移住」の対象を「人間」だけでなく「動物」に視野を広げて比較することを試みています。対人インタビュー調査ではなかなか明るみにでない事柄なので、トラデジタル・データ（新聞とソーシャルメディア）を集めて分析しています。

<演習内容>

2025年度の演習Iでは「国際比較調査（ISSP）2020 Environment IV」データを基本的に使って、世界における環境意識について学びます。データの分析結果はプレゼンテーションとゼミ論という形で発表します。**ISSP Environment IV質問票（英語）**の中に興味のある質問項目があるかを確認してください。分析対象国は日本、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア、オーストリア、中国、クロアチア、デンマーク、フィンランド、ドイツ、ハンガリー、イタリア、韓国、リトアニア、ニュージーランド、ノルウェー、フィリピン、スロバキア、スロベニア、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、台湾、タイです。強い要望があれば、世界価値観調査(World Values Survey)を使用することも可能です。

<実施言語>

日本語：授業、教材 英語：動画、文献、データなど

<ゼミ独自の選抜方法につて>

オンライン面接を実施する場合があります。

<演習Iと演習IIの連続性について>

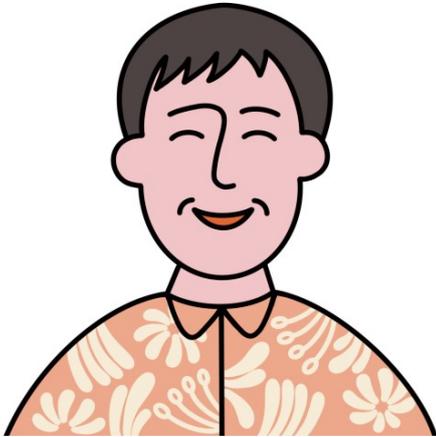
2026年度はIIを開講しません。

<卒論の推奨について>

2026年度は開講しません。

よこみぞしんいちろう 横溝紳一郎

めざそう、外国語を教える／学ぶプロ！



専門分野

日本語教育学（日本語教員養成）

専門分野の概要

日本語教員養成プログラムのデザイン・運営に加え、国内外での外国語教育・教師教育に関する講演／研修を行う一方で、ふるさと福岡でさまざまな教育活動に積極的に関わっています。現在の研究対象分野は、（a）教育実習生や現職教師に対して、教師教育者がどのように働きかけるべきか、（b）教師の言動が学習者の学習意欲にどのような影響を与えるのか、等です。どの分野においても、理論・実践の両面から調査研究を進めています。

<演習内容>

外国語を教えるためには、教えることに関するたくさんの知識だけでなく、教えることについての高いレベルの技術の獲得が必要不可欠です。こういった知識と技術の獲得は、「教えることは学ぶこと」という言葉があるように、自分自身が外国語を学ぶ際にも大いに役立ちます。「外国語（日本語・英語・フランス語）を教える先生になりたい！」「外国語教育についての知識と技術を獲得して、自分の外国語習得に役立てたい！」という、強い気持ちを持った学生向けのゼミです。

<実施言語>

使用言語及び使用するテキストの言語は日本語です。

<ゼミ独自の選抜方法について>

日本語教員養成プログラムの受講生、そして英語／フランス語の教職課程の受講生を優先的に、ゼミ生として受け入れます。志望動機書に不備がある時や、その内容が不明瞭である時など、必要に応じて面接を行うことがあります。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

2年間連続の履修は、前提としていません。

<卒論の推奨について>

卒業論文の執筆をするか否かは、各ゼミ生の意思に任せます。

わだみつまさ 和田光昌

世界を「うけいれる」-- フランス/文学のいま



専門分野

フランス語圏文学・文化（小説論）

専門分野の概要

フランス文学のゼミです。フランス文学を通してフランス語を学ぶだけでなく、「フランス文学」の語を分割して、「フランス」あるいは「文学」についても扱います。つまり、フランスの文化・社会や、日本文学やフランス以外の翻訳文学についても扱います。

<演習内容>

授業は、平易なフランス語の小説テキストや新聞記事を日本語に翻訳して読む前半と、受講生のゼミ論に向けての準備支援の後半から構成されます。

テキストとしては、2025年度は、Cloé Kormanの“Les Presque Sœurs”を読む予定です。ドイツ占領下のフランスで「ほとんど姉妹」のように生きた二組のユダヤ人の物語で、「日本の学生が選ぶゴンクール賞」に選ばれました。基礎文法・語彙を復習しながら読解力をつけ、フランス語で簡単なコメントを書く練習もします。その過程で、関連する *Le Monde* など新聞記事も読みます。

ゼミ論・卒業論文の今までの作品・テーマの例をあげると、スタンダール『赤と黒』、フロベール『ボヴァリー夫人』、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』、原田マハ、村上春樹、マリー・アントワネット、ジャンヌ・ダルク、フランスの郊外問題、日仏の同性婚、夫婦別姓について、絵画と文学、フランスの美食文化、などです。

<実施言語>

日本語を用いてフランス語を学びます。

<ゼミ独自の選抜方法について>

なし。

<演習 I と演習 II の連続性について>

2年間連続で履修すれば学びは深まります。けれど、演習 II の選択時に別のゼミから移動してもとくに問題ありません。

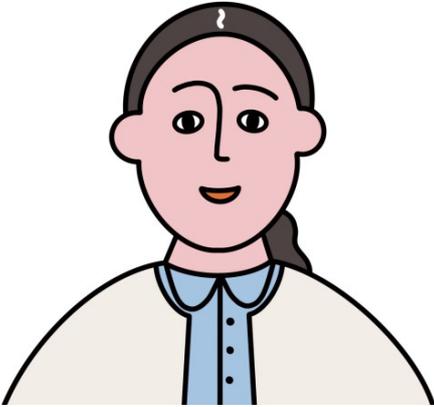
<卒論の推奨について>

推奨しますが、ゼミ論にすることも可能です。

映画の「かたち」を読む

専門分野

英語圏文学・文化（劇文学・上演・映画研究）



専門分野の概要

以前は、シェイクスピア演劇と現代イギリス演劇のテキスト研究と上演研究を行っていました。最近は、21世紀のポスト・ホラー映画に関心移し、アリ・アスター監督やローズ・グラス監督らによるA24製作／配給ホラーのケア表象について論文を書きました。現在の関心は、女性監督らによるポスト・ホラー映画と、21世紀のシェイクスピア翻案映画の動向です。

<演習内容>

映画は、建築・彫刻・絵画・音楽・文学・舞踏といった伝統的芸術に続く「第七芸術」と呼ばれています。この演習では、映画の「かたち（形式）」を研究対象に据え、物語をただ追うのではなく、画中の映像表現技法を「読む」訓練を行います。具体的には、*Filmmaker's Eye* 第2版（ボーンデジタル、2023年、3960円）の和訳を使って、基礎的な構図やカメラワークのあり方を学び、それらがいかに物語を効果的に伝えているのかを読み解きます。授業は日本語で行います。前期と後期の終わりに映画批評1本の執筆を課し、授業内で学んだことを、各自が選んだ映画の分析に応用してもらいます。授業で使用予定の映画のジャンルは多岐に渡りますが、作品によっては暴力描写や性描写を含みますので、そうした場面に抵抗がある学生さんには、このゼミは不向きです。映画と学術的に関わる楽しさを感じてもらうことが、この演習の最も大きな目的です。ミニシアターや映画祭に足を運ぶ習慣がある方、日本未公開の映画を輸入版ディスクで鑑賞している方、映画関連の研究書を趣味で読んでおられる方だけでなく、映画に興味があるという方も歓迎します。

<実施言語>

日本語

<ゼミ独自の選抜方法について>

なし。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について>

2年間連続で履修すると、学びが深まります。

<卒論の推奨について>

必須ではありません。卒論作成の準備は「演習Ⅰ」の後期から開始しますので、卒論を作成するにはこのゼミの「演習Ⅰ」を履修している必要があります。

はつみ 初見 かおり

他者と生きる



専門分野

エスノグラフィー、平和構築論、サイエンスコミュニケーション

専門分野の概要

現代南アジアの文化変容について、文化人類学の視点から研究しています。専門はエスノグラフィー（民族誌）と平和構築論です。エスノグラフィーとは、調査者が言葉や文化の異なる地で人びとの生活の中に身を沈め、身の回りで起きていることを記録し考察する手法です。スリランカ内戦について『ハレルヤ村の漁師たち：スリランカ・タミルの村 内戦と信仰のエスノグラフィー』（左右社 2021年）を出版し、内戦により生まれ育った漁村を追われ、難民キャンプ生活を強いられた人びとの体や心の変化を長期的な視点から考察しました。今後はフィールドでの経験を生かし、異常気象、民族紛争、ウクライナ紛争などのグローバルな問題に対し、人類はどのように取り組むべきかについて考察し、平和構築論の分野に貢献していきたいです。また、難しい科学的概念や発見を一般の人たちにわかりやすく提示し、科学と社会の対話の機会となるサイエンスコミュニケーションに関心があります。

<演習内容>

人を理解し愛するとは、一体どういうことでしょうか？「一度でもその人の話に耳を傾けたならば、どんな相手であれ愛することは可能だ（“Frankly, there isn't anyone you couldn't learn to love once you've heard their story.” Mr. Rogers）という名言が残っています。愛するということは受け身の行為ではなく、自ら努力し習得しなければ手に入れることができない技法（learn to love）です。その第一歩は、相手の話に耳を傾けることです。

本演習では、文化人類学が持つユニークな他者理解の技法（エスノグラフィー）について学び、「愛すること」と「生きるということ」をテーマに論じます。「他者と生きること」で全人類に共通することは何か。文化や歴史の違いによって、この能力にどのような影響が生じるのか。弱者に開かれた寛容な生き方の探究において、なぜ自己変容が必要なのか、などを論じます。

前半では、Angela Garciaのアメリカのニューメキシコ州の薬物依存症のエスのグラフィー『The Pastoral Clinic: Addiction and Dispossession along the Rio Grande』（2010）と、キプロス紛争を扱ったElif Shafakの小説『The Island of Missing Trees』（2021）、そしてスリランカ内戦を扱った『ハレルヤ村の漁師たち』（2021）を読みます。後半では、エーリッヒ・フロム『The Art of Loving』の第3章、Og Mandinoの『The Greatest Salesman in the World』、そしてリチャード・バックの『Jonathan Livingston Seagull』を読みます。

英語の文献は可能な限り原文で読み、授業はすべてバイリンガルで行います。演習Iでは、現代日本における「愛するということ」をテーマに短編のエスノグラフィーを2本課します。演習IIでは卒論の執筆を推奨します。

<使用言語> 英語と日本語

<ゼミ独自の選抜方法について> 原則、志望動機書を基に選抜します。

<演習Iと演習IIの連続性について> 演習IIの選択時に別のゼミから移動することもできます。

<卒論の推奨について> 演習IIでは卒論の執筆を推奨します。

Carey Benom

ケリー ベノム

Word Meaning in Mind, Culture, and Context



専門分野

Cognitive Sociolinguistics

専門分野の概要

Cognitive sociolinguistics is an approach that makes use of key insights from both cognitive linguistics and sociolinguistics to study language in a broader context. Combining these fields allows us to acknowledge that social identity, cultural context, and cognitive processes are all involved in language use, and our explanations for linguistic phenomena need to address and account for all of them. Cognitive sociolinguists keep speakers' social cognition and social agency in mind, as well as the fact that language is heavily context-dependent.

<演習内容>

This seminar will involve an in-depth, hands-on investigation into the meaning of words using a cognitive sociolinguistic approach. Topics may change based on students' interests, but they will probably include lexical relations (polysemy, homonymy, and vagueness), lexical networks, metaphor and metonymy, spatial language, and other traditionally cognitive linguistic topics, as well as gender, race, socioeconomic class, political correctness, taboo, and other traditional sociolinguistic topics, all while stressing the importance of methodological empiricism. Finally, participants will learn about corpus linguistics, and will practice using a corpus.

Participants will choose a single English or Japanese (etc.) word or a small number of related words, based on their interests. They will extract and analyze corpus data and present the results of their original research.

Goals: To learn about and practice lexical semantic analysis using the perspectives and approaches of cognitive sociolinguistics. To learn how to use a corpus and to analyze linguistic data.

<実施言語>

English (the teacher will provide students with readings in English)

<ゼミ独自の選抜方法について>

なし。

<演習 I と演習 II の連続性について>

2年連続履修により学びが深まります。

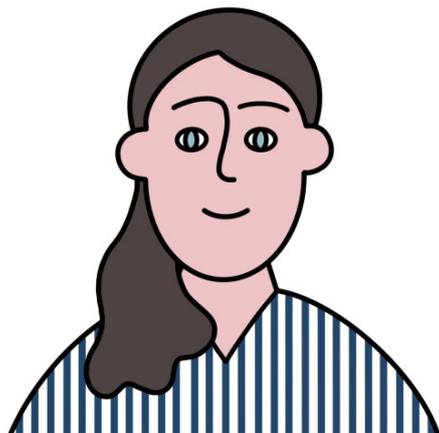
<卒論の推奨について>

推奨しますが必修ではありません。

Katharina Barkley

カタリナ バークレー

Exploring International Corporate Communication



専門分野

コミュニケーション学（多文化共生）

専門分野の概要

My research interests lie in the effects of culture on how companies use communication to achieve their strategic goals: to sell their products or services (marketing and brand management), shape their image (public relations), and manage challenges to their reputation (crisis communication).

<演習内容>

What will we be studying?

We live in a global village where it is becoming easier and easier for companies to expand their activities beyond national borders. Such expansion exposes companies to new challenges when they begin to communicate with members of different cultural backgrounds. Culture has a significant impact on (a) what companies say to achieve their goals, (b) how these messages are delivered and (c) how these messages are interpreted by the audience. Especially in international settings, companies must carefully plan what to say and how to say it. Misunderstandings can happen easily when messages cross cultural borders. This seminar is designed for students who are interested in the effects of culture on how companies communicate with the outside world. We will examine the influence of cultural considerations on a number of topics that shape public perceptions of companies: advertising, brand management, public relations, corporate social responsibility (CSR), corporate social activism, and crisis communication.

What are the key features of the seminar?

Case Study Focus: A case study approach will allow students to further develop their critical thinking skills. Interesting cases will help students learn about the real life impact of cultural differences and the need for cultural sensitivity.

Student Guided Topic Selection: While the initial activities will be chosen by the teacher, students will increasingly take the lead in choosing companies, industries, or cases that are related to their fields of interest and future career plans.

Cooperative Learning: Students will participate in team-based activities and small group discussion.

Independent Research: In the second half of the course, students will choose their own research projects. Students will choose a topic, plan their project, and collect and analyze data.

Academic Writing Practice: Students will conclude their projects by writing a research paper that presents their findings in a logical and persuasive manner.

Who should join this seminar?

The course will be conducted primarily in English and is designed for students with advanced English skills and a keen interest in learning about corporate communication and culture.

<実施言語> 英語

<ゼミ独自の選抜方法について> 面接はしませんが、志望理由は英語で提出してください。

<演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について> 2年間連続で履修したほうが学びが深まるゼミです。

<卒論の推奨について> 卒論は必修ではありません。